

2019年度活動報告

本プロジェクトは、京都という立地のもつ歴史的背景、なかでも本学の教育カリキュラムとの関連から、戦後の美術やデザインの展開とその意義を紐解いていこうという試みである。「京都美術」と、敢えて限定的な設定にしてあるのは、作家の活動や作品受容にとって、その土地の歴史性や諸条件が重要だと考えるからである。国家単位的美術史記述では漏れ落ちてしまいがちな、こうした「場」に根差した諸要素を汲み上げる研究を、とりわけ新たな美術理念の実験場として機能した本学のカリキュラムへの着目をベースに行っていくことが本プロジェクトの主眼である。またこの方法が、ひいては本学に眠る有形無形の芸術資源の掘り起こしと、それに基づく研究の進展につながることを期待している。

本学の歴史を紐解くとき、その転換点の一つとなるのが、制度的に大学に転換し、新しい教育改革のもと前衛美術の土壌が築かれることとなった1950年である。一方で、当時は第二次世界大戦の敗戦による占領期（1945-52）にあたる。とりわけ京都は西日本最大の米軍駐屯地であり、この教育改革が複雑な状況下ですすめられたことは重要である。美術史の中でも、終戦から占領期における美術家の活動は長らく空白期とされてきた。2000年以降、東京では作家への聞き取りを端緒に実証研究が進んできたが¹、関西ではこうした方向性の研究は端緒についたところである。一方で京都に関する都市史・社会史の分野では、立命館大学などを中心に占領期研究が進んできたが²、情報交換をできる場はいまだ少ない。他分野の研究者、当時を知る本学卒業生を交えて研究会を行い、終戦後～50年代にかけて、京都芸大および関係する美術家がおかれていた状況を包括的に明らかにすることは、本プロジェクトの大きな目標である。

こうしたテーマ設定と目標のもと、現在のところ具体的なケーススタディの主軸が2つ設定されている。ひとつは、彫刻科における教育改革の解明である。辻晋堂、堀内正和が進めた立体制作のカリキュラム（1953-74）は、大学として抽象というモダニズム概念をいち早く評価し、教育に取り入れた独自のものであった。辻、堀内の往復書簡（1930-50年代）を中心とする資料分析、卒業生への聞き取りといった具体的な調査をもとに、カリキュラム構築の背景とその教育の実態を明らかにする。この部分は、神奈川県立近代美術館学芸員の菊川亜騎が担当し、プロジェクトの初年度から研究成果を公開してきた³。

もうひとつの軸は、上野リチを中心とする本学のデザイン教育に関する研究である。上野リチは、ウィーン工房で活躍したデザイナーであり、上野伊三郎との結婚をきっかけに来日。その後、本学でも教鞭をとることになった。しかし、上野リチの教育者としての活動の全貌や、その背景をなす諸活動については、いまだ研究の余地が大いにある状況である。日本の意匠・デザインに対する国際的な期待の地平と戦後の実状の大きな隔たり、あるいは産業界からの要請とデザインの内容の関係性など、追求すべき論点は数多く存在する。このテーマについては、戦後京都のテキスタイル・プリント・デザインの研究を行ってきた牧田久美が担当する。⁴『COMPOST』創刊号となる本号にも、今年度の調査報告が掲載されるため、そちらもご参照頂きたい。

¹ 五十殿利治「CIE図書館と占領下の美術界」『藝叢』（筑波大学）第29号、2014年、1-17頁；『戦後の日本における芸術とテクノロジー』松本透代表、科研費研究成果報告書、東京国立近代美術館、2006年など。

² 西川祐子『古都の占領：生活史からみる京都 1945-1952』平凡社、2017年。中部大学編『占領期京都を考える』（『アリーナ=Arena』第15号別冊）風媒社、2013年など。

³ 菊川亜騎「関西西仏学館と京都の美術家—第二次世界大戦期の交流について—」『研究紀要』（京都市立芸術大学美術学部）第63号、2019年、49-56頁。

⁴ 例えば戦後京都という環境や時代背景とデザインとの関係性については以下を参照。牧田久美「戦後日本繊維産業復興期におけるGHQのデザイン育成政策：絹輸出貿易における販売促進企画を中心に」『デザイン理論』（意匠学会）第70号、2017年、63-77頁。

このように、本プロジェクトの主軸は、彫刻（美術）とテキスタイル・デザインという異なる領域から構成されている。しかしこれらのテーマを、カリキュラムの改変等に見られる方法論への意識、あるいは新たなデザイン観やモダニズムの受容といった共通の観点から研究していくことで、近代から現代への架橋となるこの重要な時期に対する認識は著しく深まりうると思われる。また、卒業生や関連作家への聞き取り調査など、オーラルヒストリーの手法を活用することで、本研究はさらに実質的で意義あるものとなるであろう。聴取等でご助力いただく機会もあるかもしれないが、その際には是非、貴重なご助力を賜れば幸甚である。

深谷訓子（美術学部准教授） 菊川亜騎（神奈川県立美術館学芸員）